様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年４月１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７２０１５７
研究課題名（和文）　１７世紀オランダに普及した日本情報の総合的研究

研究課題名（英文）　A Comprehensive Survey of the Diffusion of Knowledge on Japan in 17th Century Holland

研究代表者
Frederik CRYNS（フレデリック クレインス）
国際日本文化研究センター・研究部・准教授
研究者番号：９０３７０１３９

研究成果の概要（和文）：

本研究では、17 世紀オランダで日本についてどのような情報がどのような経路で伝わり、その情報がどのように普及・利用・理解されたかを総合的に調査・分析した。その結果、次の特徴があることを示した。

（１）17 世紀オランダを中心に日本について質の高い最新情報がヨーロッパに発信された。
（２）この日本情報の伝達媒体として東インド会社文書が重要な役割を果たした。
（３）17 世紀オランダでは日本に対する関心が強く、日本文化に対する親近感があった。

研究成果の概要（英文）：

This research focuses on the transmission of knowledge on Japan to the Netherlands in the 17th century. We analyzed the nature of the knowledge on Japan and the route through which the knowledge was transmitted as well as how it was diffused, used and understood. We found following results:

(1) In the 17th century high level up-to-date knowledge on Japan was diffused in Europe through the Netherlands

(2) The Dutch East India Company played an important role as transmitter of this knowledge.

(3) In the Netherlands there was a vivid interest for things Japanese and there was a feeling of familiarity towards Japanese culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,400,000	0	1,400,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	420,000	3,220,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：日本関係欧文図書、日本観、東西文化交流史、１７世紀オランダ、江戸時代

１．研究開始当初の背景

西洋で普及した日本情報に関する従来の研究は、16 世紀イエズス会の日本報告と 18 世紀初めのケンペル『日本誌』を中心的な対象としてきた。イエズス会による日本報告は、戦国期から織豊政権期にかけて多くの日本情報をヨーロッパに伝達した日本関係資料の宝庫である。また、18 世紀初めのケンペル『日本誌』も、日本での直接見聞に基づく多くの情報をヨーロッパに伝えるとともに、キリスト教布教を中心としたイエズス会型日本観に対峙する「科学的」なオランダ商館型日本観を成立させた画期的なものとして位置づけられる。これらの時期と比較すると、17 世紀は、カロンのようなオランダ商館員によるわずかな情報しかヨーロッパに届かず、日本に関する情報が枯渇状態にあったというのが通説となっていた。そのために、17 世紀においてオランダと日本の間に活発な交流が存在していたにもかかわらず、17 世紀オランダにおける日本情報の普及については十分研究されてこなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の課題を解明することである。

（1）17 世紀オランダにおいて日本についてのどのような情報が普及したか。

（2）日本情報がどのような経路でオランダに伝達されたか。

（3）日本情報がオランダやヨーロッパでどのように受容され、普及されたか。

（4）日本情報は正確であったか。

３．研究の方法

（1）17 世紀オランダにおける日本情報の普及を解明するために、国際日本文化研究センターの外書コレクションをはじめ、国内外の古書店で資料調査を行った上で、オランダのアムステルダム大学図書館・ハーグ国立文書館・オランダ王立図書館を訪書し、日本についての記述が掲載されている可能性のあるオランダの 17 世紀出版物を調査し、日本関係図書チェックリストを作成した。

（2）日本情報の伝達経路を解明するために、これらの日本関係図書における日本に関する記述内容を、イエズス会士の日本報告やその関連図書および東インド会社文書の内容と比較分析した。

（3）日本情報の受容について解明するために、これらの日本関係図書について、各資料の書誌・性質・位置づけ・思想的背景および著者の伝記について調査し、日本についての記述内容を文献学的に分析した。また、各資料の出版史や後に出版された図書との内容比較を通じて、その資料における日本情報がオランダにおける日本観に与えた影響を調査した。

（4）日本情報の性質を解明するために、これらの日本関係図書と典拠との比較分析並びに日本側史料との照合作業を行った。

４．研究成果

17 世紀オランダにおける日本情報の伝達・受容という課題に取り組んだ結果として、17 世紀オランダにおける日本関係記述の出版史には、日本という異文化に関する知識受容の形成過程が如実に映し出されているこ

とを解明した。

オランダ人が最初に日本と接触したのは、リンスホーテンの『東方案内記』(1596 年刊)であった。同書はオランダ人にとってアジアというまったく新しい世界への窓を開いた。そのアジアの記述の中に日本の情報も含まれていた。日本に関する記述はリンスホーテン独自のものではなく、すでに半世紀に渡って日本との関わりを持っていたイエズス会士の報告を集約したマッフェイの『インド史』(1589 年刊)を典拠としたものであった。やがて、オランダ人が自らアジアへの進出を果たし、その過程で海賊ファン・ノールトが実際に日本人と接触し、その最初の印象について書き留めた記録(『世界一周紀行』1602 年刊)がオランダに届き、日本に対する興味を刺激した。この初期においては、オランダに伝達された日本情報はまだ少なく、日本は銀が豊富にある不思議な国として認識されていた。

ところが、東インド会社の設立以後、日本情報は東インド会社職員の文書を中心にバタフィア経由でオランダに届くようになった。コメリンの『東インド会社の起源と発展』(1646 年刊)には日本に関する東インド会社の文書が数多く掲載されており、その中でもハーゲナールの江戸参府日記、後水尾天皇の二条城行幸に関するクラーメルの観察記録、カロンの日本報告は日本情報をヨーロッパに伝達した重要な史料として位置づけられる。ハーヘナールの江戸参府日記は内から見た日本の最初の一瞥をオランダ人読者に与えた。クラーメルによる行幸の観察記録で示された日本の支配者の豪華さはオランダ人読者を驚かせた。そして、カロンの日本報告は「日本とはどういう国か」という質問に包括的に答えたものであった。

モンターヌスの『東インド会社遣日使節紀行』(1669 年刊)は日本情報伝達の頂点に達した。モンターヌスは 17 世紀中期における東インド会社職員による複数の江戸参府日記を編纂したため、その大著は当時の日本の実見に基づいた最新の情報を提供していた。モンターヌスのよどみない文体は、オランダ人読者を東インド会社の職員と一緒に日本を旅している気分にさせた。日本の各所を観光しながら、オランダ人読者は日本の様々な慣習や文化、歴史についての説明を受けた。これらの叙述の典拠は実見に基づいているものが多く、日本がありのままの姿に表現されている。また、日本人の宗教や慣習について、モンターヌスは常にヨーロッパの古代や他の地域との類似性を説いているため、日本人はキリストという真の神を知らないにしても、その社会はヨーロッパとそれほど違いのない、同質の社会として認識され、とても身近に感じられる存在となった。

『東インド会社遣日使節紀行』以後は、日本に関する新しい情報が減少した。日本を訪れた冒険家ストライスは長崎をほんのわずかしか見ていない(『三大旅行記』1676 年刊)。もう一人の旅行家スハウテンは日本にたどり着くことさえできなかった。そのため、スハウテンは『東インド紀行』(1676 年刊)における日本に関する記述のためにカロンやモンターヌスを参考にせざるを得なかった。これによって、スハウテンは無意識に日本情報を整理し、それを元に初めての一つのまとまった日本観を形成した。その日本観は次のようなものであった。支配者が絶対的な権力を持つ力強い帝国であり、一般の日本人は豊かで、我慢強く、礼儀正しく、頭が切れるが、その反面、無慈悲で残酷であり、異端な偶像崇拝を行っている。また、女性や弱者の立場はうらやましいものではない。このような日本観はカロンやモンターヌスが与えた好印

象から少し遠のいたものであった。スハウテンによる日本情報の整理は、その後、他のヨーロッパ人著者によって受け継がれ、18 世紀に日本情報を博学の対象として分類して、体系的に捉えようとするようになった。

以上の成果は『17 世紀オランダ人が見た日本』（臨川書店、2010 年 5 月出版予定）と題する図書で発表する。また、オランダのライデン大学からこの分野を専門とする研究者を招き、2010 年 3 月 19 日～20 日に国際日本文化研究センターにおいて国際シンポジウム「出島文書と徳川時代」を開催し、その中で「17 世紀ヨーロッパにおける日本情報の伝達媒体としての東インド会社文書」と題する成果発表を行った。また、本シンポジウムの論文集を編集し、刊行する予定である。

その他に、中間報告として、2007 年に「十七世紀バタヴィアからの日本情報―スハウテン『東インド紀行』における日本関係記述」と題する論文を『日本研究』35 巻に投稿した。2008 年 9 月 16～19 日にリスボンで行われた日本資料専門家欧州協会で「日文研所蔵日本関係欧文図書コレクション」の題で日本関係図書の位置づけおよび性質について発表し、2008 年 10 月 30 日に国際日本文化研究センターの一般公開講演会で「西洋人の見た日本」の題で日本関係図書における日本情報について発表した。また、『旅と日本発見』（2009 年刊）に掲載された論文「オランダ商館型日本観と鎖国」では鎖国によるオランダ人の日本観の変遷を分析した。さらに『日本研究』40 巻（2009 年刊）に掲載された論文「ポンペの日本史観」ではオランダ人の日本史観の形成について分析した。

なお、2009 年 6 月 3 日に国際日本文化研究センターの海外研究交流シンポジウム「他者になること--東西文化の変容の体験と物語」において「William Adams in Japan」と題する発表を行った。この発表はフランス語の論文として投稿中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① クレインス、フレデリック、ポンペの日本史観、日本研究、査読有、40 巻、2009 年、pp.319-356
② クレインス、フレデリック、オランダ商館型日本観と鎖国、査読無、旅と日本発見、2009 年、pp.197-207
③ クレインス、フレデリック、日文研所蔵日本関係欧文図書コレクションの特徴と意義、査読無、日文研 41 巻、2008 年、pp.69-71
④ クレインス、フレデリック、十七世紀バタヴィアからの日本情報―スハウテン『東インド紀行』における日本関係記述、日本研究、査読無、35 巻、2007 年、pp.275－310

〔学会発表〕（計４件）

① クレインス、フレデリック、17 世紀ヨーロッパにおける日本情報の伝達媒体としての東インド会社文書、海外研究交流シンポジウム「出島文書と徳川時代」、2010 年 3 月 20 日、国際日本文化研究センター（京都）
② クレインス、フレデリック、William Adams in Japan、海外研究交流シンポジウム「他者になること―東西文化の変容の体験と物語」、2009 年 6 月 3 日、国際日本文化研究センター（京都）
③ クレインス、フレデリック、西洋人の見た日本、一般公開講演会、2008 年 10 月 30 日、国際日本文化研究センター（京都）
④ クレインス、フレデリック、国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書コ

レクションについて、The 19th Annual Conference of the European Association of Japan Resource Specialists、2008 年 9 月 17 日、リスボン

〔図書〕（計 1 件）

① クレインス、フレデリック、臨川書店、17 世紀オランダ人が見た日本、2010 年、全 200 ページ

研究者番号：
(1) 研究代表者
Frederik CRYNS（フレデリック クレインス）
国際日本文化研究センター・研究部・准教授
研究者番号：９０３７０１３９